

彼女が連れて行かれた部屋には、簡易ベッドと、小さな机、丸椅子があった。

戸棚には、薬らしきものもみえる。

聴診器を身につけながら、彼は彼女に座るように命じた。

「何も自覚症状はないのか」

「そういえば……今朝から少し頭痛が。最近、食欲もなくて」

「そういうことは早く言え」

めずらしく強い口調で言われて、彼女は身をすくめた。

「……大丈夫だよ。すぐ治るから」

「診察しろといったのは君だろ」

そういえば、そうだったような気もする。いや、なんか違うような気もする。

彼女はすっかりさっきのことを忘れていた。

もともとその場しのぎだったので、記憶に残っていない。

しかし、そんなことを言い出せる雰囲気でもなく、神妙に頷くしかなかった。

「はい。お願いします」

「じゃ、脱いで」

「はい……」

彼女は、借りてきた猫のようにおとなしく、彼に言われるがまま、診察を受けた。

一箇所の部位を調べるたび、たぶん診察とは関係のないことで、ネチネチ指摘されたが、最終判断はわかりやすかった。

「明らかな睡眠不足。それに起因した体調不良。具体的に言えば抵抗力の低下と消化器系の機能不全。おまけに栄養失調気味。いったいどんな生活を送れば、そこまで衰弱できるんだ」

呆れたというよりは、訝しげな表情を向けた彼は、聴診器を外すと、ベッドに腰掛けた。

スプリングの軋む音がした。

「試験があって…」

「終わったんだろ」

「そうなんだけど…」

「とにかく今すぐ帰って、休め」

「大丈夫。気力でなんとか」

「その大丈夫が、まったく当てにならないことは、たったいま証明された」

返す言葉も見当たらない。

しゅんとした彼女に、彼は大仰なため息をついた。

「体調管理をしろといってるだけだ。なぜそれができない」

わかってるんだけど、と彼女はつぶやく。

「勉強していると、落ち着くの。一心にひとつのことに取り組んでいると、余計なことを何も考えなくていいっていうか、こころがすうっとするというか」

彼は少しだけ笑った。

「随分と前向きな現実逃避だな」

「でしょ？」

「けど、自己コントロールができないのなら、容認はできない」

仕方ないな、といった眼差しだった。

「言ってみろ」

彼女はきょとんとする。

「何が？」

「悩みがあるんだろ。聞いてやるといってる」

「えっ!？」

なんでわかったの、と顔全体で表現した彼女を見て、彼はムッとした顔をした。

「そういっただろ」

「言ってないよ」

「余計なことを何も考えたくないから、勉強に逃避してるということは、つまり、余計なことを考えてしまうということだ。それが悩みでなくてなんなんだ」

「すご・・・名探偵みたい」

「普通わかるだろ」

「わからないよ」

「いいから言え」

しまいには、命令になった。

最初から、聞いてやるだの、偉そうなことこの上ない。

けれども彼女は、じっと彼の顔を見つめたあと、おもむろに首を振った。

「無理」

彼はジロリとにらんだ。

「理由は」

「とにかく無理」

「却下」

「無理なものは無理」

いつになく頑なな態度に、彼は少し驚いた様子だったが、無理強いをするつもりはないらしい。ほっと息をつくと、視線を下げた。

「だったら、自分の体調管理くらいしてくれ」

「それは、極力、善処しま、す・・・」

しどろもどろな返事に、顔をしかめる。

「うそだな」

「いや、だから、努力は」

「オレは君に努力を求めている」

きっぱりいって彼は、突き刺すような視線を向けた。

「過程は問わない。結果を出せ。つまりこの場合、オレの前に現れる際は、いつも健康体でいろ。わかったな」

「・・・どりよく」

します、とはもはや言えない彼女であった。

けれども、はいわかりました、とも、正直な彼女は言えないのであった。

だから言い訳するように付け足した。

「だって、自分で自分を止められないんだもの。自己コントロールなんて、できないよ。自分の心なのに、自分でもどうしようもないなんて、不条理だよ」

「それは言い訳か」

凶星をさされた。

しかし彼女は、おそろおそろだが、守るよりは攻めた。

「あなたはできるの」

「質問を質問で返されるのは、好きではない」

そうはいったが、彼は特に気分を害した様子でもなかった。

むしろ不敵なほほえみを浮かべ、彼女に視線を返す。

「やはり君は勘違いをしているな。オレがコントロールしろといったのは、心ではなく、行動だ。君がどれくらい悩んでいるかは知らないが、だからといって行動しないのは、単なる言い訳だといったまでだ」

なにか反論は？

まるでそういつているかのような、自信に満ちた眼差し。

彼女は白旗をあげることにした。

「でも直せない。だから、どうしようもないのは本当」

「考えないようにするほど、考えてるということに気づくべきだな。正面から見つめない限り、解決はしない。ま、時間が経てばたいていのことは取るに足らないものと気づくけれど」

「それは絶対ない！！」

思わず大声を出して、彼女ははっとした。

彼が静かな瞳を向けていた。

「・・・ごめん、つい」

「そんなに、大切なことなのか」

その瞳が、どこか悲しげに見えたのは、彼女の気のせいだったかもしれないけれども。

「オレには、話せない？」

でも、たとえ気のせいだとしても、こんなふうに見つめられるのは、とてもつらい気持ちでした。

彼女は少し迷ったが、やがて意を決して、彼をまっすぐに見つめた。

「じゃあ、言うけれど、怒らないでね」

薄青の瞳に、自分が映るのがみえた。

「恋、しちゃったみたいなの・・・博士（あなた）に」

彼は、わずかに、目を眇めた。

「面白くない冗談だな」

「そう言われる気はしたんだけどね」

苦笑いして、彼女はふっと視線をそらした。

「自分でもね、変だなあ、って、何度も思ったんだ。だって何がいいのか全然わからないし」

「・・・・・・・・・・」

「だけど心は、オートマティックにあなたを探すんだもの。参るわ。本人の意志はてんで無視。これ、どういうこと？」

そういつて、振り返る。どんな顔をしたらいいのかわからなかったから、とりあえず笑顔を見た。あえて作らなくても、正直に告げられたことで、心から笑顔になれた。

「あなたなら、私の心を分析できるのかしら。優秀なお医者様」

彼は黙って彼女の言葉を聞いていたが、やがてほっと息をついて、投げ捨てるようにいった。

「単なる気の迷いだろ。そのうち忘れる」

「かもねえ」

彼女はもう、ムキになったりはしなかった。

自分の気持ちを受け入れてもらえない、それくらいのことで感情的になるなんて浅はかだ。

「でも、そのうち、は、今じゃないんだから、解決策にならないよ」

「放っておけ」

「人の話をちゃんと聞いてた？」

彼女は、一息分、顔を近づけた。

「放置できるくらいなら、こんなに勉強なんかしないよ。でも頭がよくなるかもしれないから、それもいいかと思うことにしたの。多少の体調不良なんて、よくある話でしょ？」

何も無理などしていない。

いや、それは少し言い過ぎかもしれないが、そうみえるように努力はしたつもりだった。

じゃないと、この場を取り繕えなかった。

「そんなわけで、あなたの質問には答えたからね。それじゃ、そろそろ帰る」

「おい」

「うん、家に帰って、寝ないとね」

「ユキ」

「じゃあそういうわけで」

そういつて立ち上がりかけたとき、腕をつかまれた。

強く、引き戻される。

「博士？」

彼はいつになく、真剣な眼差しを彼女に向けた。

「本当にそれだけ？」

彼女は驚いた。彼はほとんどくいいるように彼女を見つめた。

「オレに言いたいことは、それで全部か」

「・・・そうだよ。ほかに何かあるの」

「じゃあ、どうして逃げようとする」

「逃げてないよ」

「泣きそうな顔だな」

虚をつかれた。少しもそんな風には思っていなかったのに、言葉にされて、気づかされる。

「あなたのそういうところ、すごく嫌い」

久しぶりに、涙の味を思い出した。

「オレは案外、キライじゃないよ」

ふっと笑って、彼は言った。

「誤魔化そうとして、失敗する君が」

「だから、あなたのそういうところがわたしはすごく——ン・・・」

言葉を、奪われる。

「・・・・・・・・・・」

「すごく好きなんだろ」

彼女は一瞬、返す言葉が出てこなくて、そのわずかな間が、勝敗を決めていた。

もう何がなんだかわからない。

悩みは解決するどころか、ますます深まるばかりだった。

彼女は恨めしそうに言った。

「そんなにわたしを勉強させたいわけ？」

「かもね」

「だったら、望み通りにしてやるわよ。その代わりに、倒れたら責任とってよね」

ほとんどヤケでそう言うと、彼は小さく笑った。

「いつでも診てやるよ」

彼女はますます不機嫌になる。

「あなたに払える治療代なんて、ないからね」

「いいよ」

彼は、もう一度、今度はゆっくりと顔を近づけた。

「今、もらっておく」